

中国のムスリムとオスマン帝国： 信仰・インテリジェンス・近代化¹

海野典子（大阪大学大学院人文学研究科）

1. はじめに

中華人民共和国の 55 の少数民族の一つである回族（歴史的呼称は回民）は、7 世紀以降来華した西・中央・東南アジア出身のムスリムの末裔と土着の人々の通婚により形成された民族だと言われている。

回民は中国とイスラーム世界を繋ぐ存在として歴史上のさまざまな場面で重要な役割を果たしながらも、長いあいだ非ムスリムによる偏見や差別にさらされてきた²。特に 19 世紀後半に雲南と西北地域で発生したムスリムによる大規模な武装蜂起が清朝によって鎮圧された後、回民に対する暴力行為が全国的な社会問題となると、各地の回民エリート（アホンと呼ばれる宗教指導者³、ジャーナリスト、教育家、実業家など）のなかから、回民の教育水準や政治・社会的地位を向上させ、その生命と信仰を守るために、「念経」、すなわちイスラームに関する学問しか教えず、漢文学習を軽視してきた伝統的な宗教教育（経堂教育）を見直すべきだという声が上がった。彼らが代わりに唱えたのが、「念書」と呼ばれる、漢文典籍や近代的な科学知識を教える新式教育の重要性である。20 世紀初頭には、イスラーム諸学のみならず、歴史・地理・数学・商業・法律などの近代的諸知識を教え、アラビア語と漢語の両方に精通した「念書」的人材の育成を行う新式学校が、清朝の首都であった北京や天津・上海・鎮江・成都などの諸都市に設立されていった。また、ほぼ同時期には、回民による初めての定期刊行物『正宗愛国報』（1906–1913）が創刊されるとともに、「民族」や「宗教」といった日本語から漢語に紹介された概念に関する議論が回民のあいだでも沸き起こった⁴。これらの新式学校で教育を受けた人々や回民メディアで議論を牽引した人々は、のちに回民社会の指導者として活躍するのみならず、中華民国期や中華人民共和国期に政

¹ 本研究は、公益財団法人 JFE21 世紀財団の 2021 年度「アジア歴史研究助成」の成果の一部である。

² 清代における回民への蔑視や彼らの法的地位については、(Lipman 2006) を参照。

³ アホン（漢語では阿訇、阿衡、阿洪などと表記）は、「イスラーム諸学を修めた者」を意味するペルシア語（*ākhund*）に由来する。

⁴ 近代回民エリートの「民族」「宗教」概念に関するさまざまな議論については、(松本 1999 : 288–295) (王 2006 : 115–156) (Cieciura 2016) などを参照。これらの先行研究が明らかにしているように、回民の「民族」「宗教」論に先鞭をつけたのは、明治日本に留学していた 36 名の回民青年たちが東京で結成した留東清真教育会の機関誌『醒回篇』（アラビア語タイトル *Istīqāz al-Islām*）所収の諸論文であった。

治・外交・経済・学術文化面で大きな功績をあげたことでも知られている。

つまり、清朝末期から中華民国初期の 1900–10 年代は、中国ムスリム史の転換点であった。しかし、利用可能な漢語の一次史料が他の時期に比べると少ないこともあってか、中国ムスリム史上における同時期の重要性は十分に認識されてこなかった。清代のイスラーム学者の思想的営為や 19 世紀後半に雲南・西北地域で発生したムスリム反乱の顛末、中華民国期（特に 1920–40 年代）の回民知識人の文化活動やナショナリズム言説についての豊富な研究蓄積が見られるのとは対照的に、清末民初期の回民の状況に関する研究は不十分であると言わざるをえない⁵。

1900–10 年代はまた、王寛アホン（または王浩然、1848–1919）をはじめとする北京の回民エリートが教育改革を推進するなかで、清・民国政府のみならず、回民に戦略的重要性を見いだしたオスマン帝国や日本との関係を深めていった時期でもある。この頃に王らが進めた改革や諸外国との交流は、1920 年代後半以降に本格化する回民の近代化運動の基盤をつくるとともに、中国内外の諸勢力による回民を対象とした懐柔工作を準備したという点において、重大な意味を持つ。

19 世紀後半、西欧列強との戦争に敗れ産業・軍事・政治・教育の近代化を模索していた清朝とオスマン帝国の間で、官僚・知識人・革命家の往来が急増したことは、すでに (Palabıyık 2013) (Fidan 2019) などが指摘している。だが、これらの研究は旅行記の断片的記述の紹介に留まっており、両帝国間の人的交流が双方の政治や社会に与えた影響を検討するに至っていない。また、清朝統治下の新疆のテュルク系ムスリム（現在のウイグル人にほぼ相当）の教育改革や独立運動へのオスマン帝国の関与 (Brophy 2016) が注視される一方、両帝国間関係の構築に大きな役割を果たした回民の存在は等閑視されてきた。さらに、20 世紀前半に中国各地で展開された日本の対回民宣撫工作（いわゆる回教工作）⁶に関する先行研究⁷では、回民の政治利用をめぐるオスマン帝国と日本の思惑が交錯していたことは、ほとんど触れられていない。

そこで、本稿は、回民とオスマン帝国間のネットワークが、回民の教育改革、中国情勢、回教工作や国際関係に与えたインパクトを明らかにすることによって、20 世紀

⁵ この傾向については、すでに (Unno 2018: 12) が一部指摘している。清末民初期の回民社会の実情を知るための漢語史料の少なさは、回民と交流のあったキリスト教宣教師、オスマン帝国やロシア帝国出身のムスリム、日本の軍人やジャーナリストが残した報告書・定期刊行物・旅行記などによってある程度補うことができる。これらの史料を活用した研究として、(Yamazaki 2014) (Yamazaki 2018) (Unno 2018) (海野 2021) (海野 2025) が挙げられる。

⁶ 日本が世界各国・各地域のムスリムを対象として行った、一連の懐柔工作や諜報活動、および研究調査の総称。とりわけ、日中戦争期の中国における回教工作は、日本の大陸政策を円滑に進めるための国家プロジェクトとして大々的に実施され、中国各地のムスリム社会に大きな衝撃を与えた (山崎 2012: 268)。

⁷ 代表的研究として、(新保 2018) と (Hammond 2020) を挙げておく。1900–20 年代の北京における対回民宣撫工作に関する研究には、(Yamazaki 2014) (海野 2022 a) などがある。

初頭の回民社会の知られざる一面を明らかにするとともに、近代中国ムスリム史を同時代の国際的文脈のなかに位置づけて描くことを試みる。本稿の構成は以下のとおりである。まず、オスマン帝国が回民に関心を抱き、中国に使節を派遣した経緯を調べる。次に、中国滞在中のオスマン帝国出身者の活動やオスマン帝国の政治に対する回民のさまざまな反応を分析する。続いて、回民を足掛かりにして中国に自勢力を浸透させることを目論んでいた日本の回教工作関係者やその外国人協力者が、中国に滞在中のオスマン帝国出身者に接近したことを指摘する。最後に、議論をまとめるとともに、回民とオスマン帝国の関係がその後の中国・トルコ関係に及ぼした影響を考察する。主要な一次史料として、1906 年 10 月に北京在住の回民ジャーナリスト、丁宝臣（1876–1913）が王子貞、楊曼青といった回民実業家の支持のもと創刊した日刊紙『正宗愛国報』を用いる⁸。

2. オスマン帝国の回民への接近

オスマン帝国第 34 代皇帝のアブデュルハミト 2 世（在位 1876–1909）は、後述するように、凋落しつつある帝国の財政再建の起死回生策として、清との外交・通商関係樹立を望んでいた。19 世紀末にオスマン帝国の官僚や文人が中国を旅行し、政治・経済・軍事や現地のムスリムの様子について詳細な記録を残した⁹のは、こうした皇帝の意向と無関係ではあるまい。

アブデュルハミト 2 世が回民に強い関心を抱いたきっかけの一つは、義和団事件の最中に多数の外国人を襲撃した清朝廷直属の武衛軍、いわゆる甘軍の躍進である。甘軍は、1895 年に甘粛と青海で発生したムスリム反乱（いわゆる第三次河湟事変）を平定するために、甘粛省（現在は寧夏回族自治区）固原出身の軍人、董福祥が西北地域のムスリムを招集して創設した、甘粛回民を主力とする軍事集団として知られる。董自身は、回民ではなく漢人であったという説が有力である¹⁰。

義和団事件制圧のため北京に派遣された甘軍に恐れをなしたドイツ皇帝のヴィルヘルム 2 世（在位 1888–1918）は、かねてより親交のあったアブデュルハミト 2 世に助けを求めた。ヴィルヘルム 2 世は、イスラーム世界の最高権威者たるカリフを兼ねる

⁸ 『正宗愛国報』をはじめ、本稿で用いる漢語定期刊行物の発行日は新暦・旧暦の両方で書かれている場合があるが、本稿では新暦のみ表記する。筆者が使用したマイクロフィルム（正宗愛国報社 1987）に所収されていない 1906–07 年刊行の号の一部は、20 世紀前半に活躍した張子文アホンの息子である故・張巨齡氏（2016 年没）の個人コレクションを 2014 年に撮影し、利用を許可していただいた。ただ、そのなかには複数の頁が散逸し、号数や発行日がわからないものもある。同紙引用の際、一部の記事についてやむをえず号数（発行日）不明と書いたのは、こうした事情による。

⁹ (Palabiyik 2013) は、清末中国を旅行したオスマン帝国出身者の中国認識を明らかにしている。

¹⁰ 董福祥と回民の関係、および甘軍の活動については、(Lipman 1997: 156、168–169、181–182) に詳しい。

オスマン帝国皇帝であれば、中国のムスリムを説得し撤退させることができると思うたのだろう。ドイツに貸しをつくりたいオスマン帝国は、1901 年に救援艦隊を中国に派遣した。このときすでに騒乱は収束していたが、この一件を通じて、アブデュルハミト 2 世は強固な団結力と軍事力、広範なネットワークを持つ回民に利用価値を見出し、オスマン帝国と清の仲介を期待するようになったらしい (Brophy 2016: 89–90) (Sırma 1979) ¹¹。

オスマン帝国は、遅くとも 1906 年前半までには、外国人（特にキリスト教宣教師）排斥の風潮が強い中国に滞在するオスマン帝国出身者の保護を名目にして、清との国交樹立交渉を開始していた。だが、清側の反応は芳しいものではなかった¹²。なお、これに先立つ 1904 年、教育改革への機運が高まっていた北京の回民（おそらく王寛）がオスマン朝廷に中国へのイスラーム学者派遣を求める手紙を送ったとき、アブデュルハミト 2 世はオスマン帝国と中国のあいだに外交関係がないことを理由にして、この要請を断っている¹³。

1907 年、アブデュルハミト 2 世（漢語では哈密徳）がメッカ巡礼を終えて中東遊歴中の王寛をイスタンブールの宮殿で歓待したのは、王がオスマン帝国と中国の橋渡し役になることを期待したためだろう。皇帝は、王の帰国にあわせて二人のイスラーム学者、アリー・ルザ（阿里雷抓）とハーフズ・ハサン（哈夫蘇哈三）を中国に派遣した¹⁴。彼らは、オスマン帝国の援助を受けて王寛が 1908 年に牛街モスク内に設立した新式学校（京都牛街清真西寺公立両等小学堂）【写真 1】で、回民子弟向けにイスラームの基礎知識を教えたという¹⁵。アブデュルハミト 2 世の名を冠した Dâr'ül-Ulûmî'l-Hamidiyye（ハミードの知の館）という同校の名称は、オスマン帝国との関係を示唆している¹⁶。その開校記念式典で撮影された写真には、中央に写る王寛の傍らにアリー・ルザとハーフズ・ハサンの両名が立っているのが確認される。また、後方に掲げられた新月（ヒラル）を模ったオスマン帝国旗からは、同校関係者らのオスマン帝国に対する友好的な態度が看取されよう。

【写真 1】京都牛街清真西寺公立両等小学堂の開校記念式典¹⁷

¹¹ (海野 2025) は、義和団事件が華北回民エリートの改革思想や諸活動、彼らとオスマン帝国の関係に与えた影響を論じている。

¹² 中央研究院近代史研究所所蔵 Ref: 02-05-005-01-002.

¹³ 「土国函辞派員提倡回教」『正宗愛国報』第 11 号、発行日不明、6 頁。

¹⁴ (尹 1935 : 15–16)。ただし、このときオスマン帝国から派遣された使節は 3 人ないし 4 人であったという説がある (中西 2014 : 121–123)。

¹⁵ (Broomhall 1966 (1910): 200–201) (İbrahim 1911: 537–540)。なお、1910 年代前半には、ロシア帝国領内の新式ムスリム知識人（いわゆるジャディード）が、北京をはじめとする中国の諸都市で女子生徒を含む回民子弟に近代的学問やイスラーム諸学を教授していた (Yamazaki 2018: 33–34)。

¹⁶ このことは (海野 2021 : 232) (Sırma 1978) も指摘している。

¹⁷ 本資料は、2014 年に故・張巨齡氏の自宅で撮影させていただき、研究目的での使用



清末中国に滞在していたイギリス人宣教師のマーシャル・ブルームホール（1866–1937）がロイターの記者に伝え聞いたところによると、アリー・ルザは牛街礼拝寺で教育活動を行っていた（Broomhall 1966 (1910): 200–201）。また、ロシア帝国出身のタタール人ムスリムで、イスラーム世界を西欧の帝国主義・植民地主義者から救うために日本の回教工作に協力していたアブデュルレシト・イブラヒム（1857–1944）は、日本の軍人やアジア主義者の勧めで 1909 年 6–9 月に中国を訪問した際、北京でアリー・ルザとハーフズ・ハサンに面会している¹⁸。イブラヒムによれば、両者によって北京市内にメクテブ（学塾）が開かれ、多くの回民子弟がそこでアラビア語や近代的諸学問を学んでいたという（İbrahim 1911: 537–540）。イブラヒムはまた、アリー・ルザが北京や漢口で商業関連の情報を収集していたこと、アリー・ルザの尽力により毎週の金曜礼拝の際に回民が歴代オスマン皇帝の名前を読み上げるようになったと記録している（İbrahim 1911: 537–540）¹⁹。つまり、二名のオスマン帝国のムスリムは

許可を得たものである。

¹⁸ イブラヒムの中国旅行の詳細やそれが 1930 年以降の日本の回教工作にもたらした影響については、拙稿（Yamazaki 2014）を参照。イブラヒムによると、漢語を話すことができず旅費が底をついていた北京滞在中の彼の世話を焼いたのが、王寛であった。

¹⁹ ただし、アリー・ルザの中国訪問よりも早い 19 世紀末に中国東南の沿海部を旅行したオスマン帝国のムスリムは、広州のモスクでオスマン帝国皇帝の名前が読み上げられていたと記している（Mustafa bin Mustafa 2010 (1894): 99–100）。

産業スパイであった（張 2001：8）と同時に、汎イスラーム主義者として知られるアブデュルハミト2世の威光を東アジアに広める役割を期待されていた（Aykurt 2013）と考えられるのである。

3. 回民のオスマン帝国への対応

北京回民エリートのオスマン帝国に対する反応はさまざまであった。

まず、アリー・ルザたちを北京に連れて帰った王寛は、中国とオスマン帝国との交易関係樹立を望み、両名を手厚くもてなした。中国とトルコは同種の国である、と演説で表明したことすらあったという（白 2007：743）。1904年、オスマン朝廷にイスラーム学者派遣を求める手紙を送った北京の回民（おそらく王寛）も、回民はテュルク系民族の末裔であると言って²⁰、両者のつながりを強調した。

王寛とは対照的に、オスマン帝国出身者の中国における活動に対して神経を尖らせていたのが、『正宗愛国報』社代表の丁宝臣である。1907年7月に丁が『正宗愛国報』に投稿した記事によると、「阿礼君」（アリー・ルザ）が「土耳其国」（オスマン帝国）から派遣された目的は、中国各省の情勢、特に経済・商業に関する情報を調べるためであった。アリー・ルザは中国南方の江南地域を旅行中、現地の回民による歓待を受けた。江蘇省鎮江市では、回民の新式学校である穆源学堂や志成学堂を視察する機会を与えられ、地元の税関職員にも面会したという。こうしたことから、丁は、アリー・ルザが「オスマン帝国に帰国後、中国とオスマン帝国の貿易関係を正式に求めるつもりである」と確信していた²¹。

オスマン帝国出身者による回民の宗教・教育・経済活動への介入に強い警戒心を抱いていた丁宝臣は、オスマン帝国と中国が交易関係を構築することの危険性を『正宗愛国報』読者に喚起するために、次のように記した。「もしわれわれ（回民）がそれ（オスマン帝国との関係）を適切ではない方法で扱ってしまうと、宗教的にも長期的な混乱を招きかねないし、国際的にも非常に大きな問題を引き起こす恐れがある」²²。中国のムスリムは、オスマン帝国のように「自分を顧みる暇さえもないほど弱い国」（自顧不暇的弱国）に依存すべきではない²³。さらに、丁は、オスマン帝国に接近する王寛を牽制するために、回民のなかの「愚かな人々」（糊塗虫）が、オスマン帝国はイスラーム保護のために中国に来なければならないと言っている、と指摘する。丁曰く、回民は瀕死の病人であるトルコの惨状を直視すべきであり、回民は外国人による保護を必要としない²⁴のである。

²⁰ 「土国函辞派員提倡回教」『正宗愛国報』第11号、発行日不明、6頁。

²¹ 丁宝臣「要得土耳其傷寒」『正宗愛国報』号数不明、1907年6月24日、3頁。

²² 丁宝臣「土使遊歴紀聞」『正宗愛国報』号数不明、1907年7月18日、3頁。

²³ 同上。

²⁴ 丁宝臣「要得土耳其傷寒」『正宗愛国報』号数不明、1907年6月24日、3頁。

平時においては、丁宝臣は王寛の掲げる教育改革の方針を高く評価しており、丁が主宰する『正宗愛国報』の報道も新式教育に対して好意的なものが大半を占めていた。それにもかかわらず、オスマン帝国のムスリムと友好関係を結ぼうとする王に対しての不満を丁が吐露したのは、瀕死の病人と揶揄されるオスマン帝国の影響を受けて中国経済が悪化した場合、中国とオスマン帝国の貿易関係樹立の立役者として回民がその経済的責任を取らされることを危惧していたからである。義和団事件をきっかけとするオスマン帝国と回民の接近は、回民の教育改革を前進させた一方で、改革派の回民のあいだに意見の対立をもたらした側面があると言えよう。

1909年のアブデュルハミト2世退位後も、一部の回民はオスマン帝国に友好的な態度をとり、中国とオスマン帝国の関係構築を期待していた。『正宗愛国報』によれば、1910年には、内モンゴルのムスリムの一団が、オスマン帝国第35代皇帝のメフメト5世（在位 1909–1918）の即位、および 1908 年の青年トルコ革命による立憲君主制の復活を祝賀するために、イスタンブルを訪れた²⁵。1912–1913 年のバルカン戦争中には、オスマン帝国を支援するために、北京のムスリムが中国各地の同教者から寄付金を集め、それをイスタンブルに届けようとしたが、清朝崩壊と中華民国成立に伴う中国国内の政治混乱のため実現しなかったという²⁶。北京を拠点として王寛とともに教育改革を推進していた奉天（現在の遼寧省瀋陽市）出身の張子文アホン（または張徳純、1875–1966）もまた、オスマン帝国との関係強化を望んでいた回民の一人である。張は、1913年にメフメト2世とシェイヒュル・イスラーム（オスマン帝国のムフティー職、すなわち宗務において最大の権力を持つ行政官）に宛てたアラビア語の手紙のなかで、オスマン帝国から中国への公式な使節派遣を要請している²⁷。

4. オスマン帝国と日本の回教工作

王寛や張子文の熱意にもかかわらず、青年トルコ革命の勃発とアブデュルハミト2世の退位による混迷のなかで、オスマン朝廷は回民への関心を失っていったようだ。アリー・ルザは、1911年に北京からイスタンブルの雑誌に送った手紙のなかで、回民のカリフに対する深い敬愛を朝廷は理解していないと嘆息している（Rıza 1329/1911）。

興味深いことに、前出のアブデュルレシト・イブラヒムの紹介により、アリー・ルザは1911年に日本を訪れ、回教工作に関与していた日本のアジア主義者（たとえば大日本帝国陸軍参謀本部や外務省に協力していたハサン波多野こと、日本人ムスリムの

²⁵ 「中国回教人致賀土皇」『正宗愛国報』第1298号、1910年7月23日、4頁。

²⁶ 「集資助鄰（I'ānat al-mulk al-jānibī bil-amwāl）」『回文白話報』第2号（1913年）、31–32頁。

²⁷ Başbakanlık Osmanlı Arşivi BEO 4186/313907 (1331/B/19), 3; Başbakanlık Osmanlı Arşivi BEO 4186/313907 (1331/B/19), 8. David Brophy 氏のご教示にお礼申し上げます。

波多野烏峰)や、日本滞在中の外国人ムスリムと交流する機会を持った(坂本 2008: 11-12)。このとき撮影された集合写真【写真 2】の中央にアリー・ルザが写っているのは、オスマン朝廷と関係の深い彼が回教工作に貢献することを期待した日本側が、彼を最も目立つ席に配置したからなのかもしれない。なお、写真のキャプション 1 の人物がアリー・ルザ (“His Honour Ali Riza Efendi”)、キャプション 3 はインド出身のムスリム革命家で反英運動家でもあったバラカトゥッラー (“M. Barakatullah”)、キャプション 7 がエジプト出身の軍人で、当時の日本陸軍参謀本部第二部長であった宇都宮太郎少将と交流のあったアフマド・ファドリー (“Captain Ahmad Fodli”)、キャプション 17 が波多野 (“Mr. U. Hatano of Tokyo”) である。この写真が掲載されたのは、1910 年 4 月から 1912 年 8 月まで、おそらくは日本陸軍による費用負担を受けて東京で刊行されていたイスラームのプロパガンダ英文雑誌 *Islamic Fraternity* である。バラカトゥッラーとファドリーは同誌の発行人であり、波多野は同誌の後継誌の編集を担当していた²⁸。アリー・ルザと波多野らの写真が *Islamic Fraternity* に掲載されたという事実は、日本のアジア主義者や彼らに協力していた外国人ムスリムのオスマン帝国への熱視線を象徴的に物語っている。

ところで、アリー・ルザの訪日を助けたイブラヒムは、1909 年の中国旅行中、北京回民に東洋諸民族の連帯を説き、日本への協力を強く勧めた。その結果、王寛ら 3 名の回民エリートが、日本陸軍軍人の大原武慶、国家主義団体・黒龍会の頭山満をはじめとする日本人 4 名とイブラヒムとの共同署名にサインしたという (İbrahim1911: 428) (Yamazaki 2014: 409-410)。また、遅くとも 1914 年には、宇都宮太郎をはじめとする一部の陸軍関係者のあいだで、日本出資の回民向けプロパガンダ新聞刊行について北京のアホン (おそらく張子文を指す) と合意したという話と、日本の傀儡政権を中国西北地域のムスリム集住地域に樹立させる案が共有されていた²⁹。同案がそのまま引き継がれたのかさだかではないが、1930 年代には、新疆に日本の傀儡政権を建設し、その皇帝にオスマン皇族を据えるという計画が存在した (デュンダル 2008)。1911 年に日本を訪れたアリー・ルザが、イブラヒムや波多野からこうした構想を聞かされていたとしても不思議ではない。東アジアを離れた後のアリー・ルザの活動についてはさらなる検討の余地があるものの、彼の訪日を通じて、中国西北地域での影響力拡大を図るオスマン帝国に日本側が強い関心を抱いたことはたしかだろう。

²⁸ *Islamic Fraternity*、およびその後継雑誌の刊行の背景や内容、バラカトゥッラー、ファドリー、波多野の経歴や関係についての最新の知見は、(野田 2022) にまとめられている。

²⁹ 芦川駿逸「対回教徒事業計画書送付の件」宇都宮太郎関係文書 (日本女子大学所蔵)、書簡編 23、大正 3 年 (1914 年) 2 月 3 日; 芦川駿逸「回回教徒ヲ顧客トシ其機関紙タル支那俗語新聞紙ヲ発行セントス」宇都宮太郎関係文書 (日本女子大学所蔵)、書類編 389、大正 3 年 (1914 年) 1 月 12 日~2 月 2 日。この文書は島田大輔氏と吉良芳恵氏のご尽力により利用の機会を得ることができたものである。

【写真 2】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所蔵資料 *Islamic Fraternity*, vol. 2, no. 1 (15 April 1911): 1.³⁰



5. おわりに

本稿は、北京回民とオスマン帝国間のネットワークが、回民の教育改革や中国情勢、国際関係に与えた影響を考察し、以下 3 点を明らかにした。

第一に、20 世紀初頭、清との外交・通商関係樹立を望むオスマン帝国と、オスマン帝国による教育改革支援を期待する一部の回民エリートが接近した。両帝国のムスリム・ネットワークは、オスマン帝国の汎イスラーム主義的外交政策や宗教感情よりもむしろ、双方のムスリムの政治・経済的思惑にもとづいて形成・維持された面がある。

³⁰ 本資料の閲覧・複写に際して、野田仁氏、および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究協力課共同研究拠点係の担当者の方にお世話になった。

つまり、ムスリム間のネットワークであっても、必ずしも宗教感情を動機とするとは限らず、実利的な目的のために構築されることがあるという事例を本稿は示した。第二に、中国滞在中のオスマン帝国出身者の活動やオスマン帝国の政治に対する回民の反応は、さまざまであった。平時は王寛の教育改革を『正宗愛国報』紙上で高く評価していた丁宝臣は、回民教育に携わる傍ら、産業スパイ活動と疑わしき行動をとっていたアリー・ルザたちに対する警戒心と、彼らの活動を支援する王への不快感を隠さなかった。改革派と一括りにされがちな回民たちも、決して一枚岩ではなかったのである。第三に、中国進出を有利に進めるため回民への懐柔工作を展開していた日本の回教工作関係者やその外国人協力者は、中国に滞在中のオスマン帝国出身者を日本に招いた。日本の回教工作の実態は、外国人ムスリムの動向や彼らと日本の関係をも視野に入れて調べる必要があるということが、本稿によって改めて確認された。

現在のトルコ共和国は、広域経済圏構想「一帯一路」プロジェクトを進める中国との経済的連携を強化する一方、ウイグル人などのイスラーム系少数民族に人権侵害を行っているとして中国政府を激しく糾弾している。中国の民族政策・宗教統制、トルコの独自外交が世界の耳目を集めるなかで、中国とイスラーム世界の狭間に立って調停役を務めようとする回族知識人・宗教指導者・留学生・ビジネスパーソンの姿は、20世紀初頭にオスマン帝国との関係を深めようとした回民エリートの構図を彷彿とさせる。1930年代になると、イスタンブールなどの中東諸都市を拠点としていた回民やウイグル人の留学生は、日本の回教工作に猛然と抗議し、日本に協力する中国国内のムスリムを厳しく批判した。こうした中国ムスリムの政治活動は、日中戦争の展開や新疆情勢、ひいては1934年に成立した中華民国・トルコ共和国の外交関係に何らかの影響を与えた可能性がある。回民を介した清・オスマン帝国関係の展開を描くことは、当時の回民社会の状況のみならず、近現代の中東と東アジアを取り巻く複雑な国際関係を理解する上での手がかりを与えてくれる。

6. 参考文献

<未公開資料>

Başbakanlık Osmanlı Arşivi

中央研究院近代史研究所所蔵档案

日本女子大学所蔵宇都宮太郎関係文書

＜公刊資料＞

日本語

海野典子「経堂教育と新式教育：20 世紀初頭の北京ムスリムの教育改革をめぐる議論と実践」高尾賢一郎他編『宗教と風紀：＜聖なる規範＞から読み解く現代』東京：岩波書店、222–242 頁、2021 年。

海野典子「日本人が見た中華民国期北京のムスリム社会：雑誌『回教』と画集『回回風俗図』を手がかりとして」小野亮介・海野典子編『近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ・情報の交錯から見る』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、327–364 頁、2022 年（a）。

海野典子「清末民初期の北京における食・衛生・宗教：中国ムスリムの「清真」意識とハラール問題への対応」『歴史学研究』第 1027 号、37–47 頁、2022 年（b）。

海野典子「華北ムスリム知識人にとっての義和団事件：教育・宗教改革への影響を中心に」『人文学林』第 2 号、2025 年刊行予定。

王柯『20 世紀中国の国家建設と「民族」』東京：東京大学出版会、2006 年。

坂本勉「アブデュルレシト・イブラヒムの再来日と蒙疆政権下のイスラーム政策」坂本勉編『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』東京：慶応義塾大学出版会、1–82 頁、2008 年。

新保敦子『日本占領下の中国ムスリム：華北および蒙疆における民族政策と女子教育』早稲田大学出版部、2018 年。

中西竜也「20 世紀初頭オスマン語による中国のムスリム事情紹介」杉山正明編『続・ユーラシアの東西を眺める』京都：京都大学大学院文学研究科、119–160 頁、2014 年。

野田仁「プロパガンダ誌『イスラミック・フラタニティ』とその後継誌をめぐる日本側の事情：ハサン波多野の役割に焦点を当てて」小野亮介・海野典子編『近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ・情報の交錯から見る』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、95–126 頁、2022 年。

松本ますみ『中国民族政策の研究：清末から 1945 年までの「民族論」を中心に』東京：多賀出版、1999 年。

メルトハン・デュンダル「オスマン皇族アブデュルケリムの来日」坂本勉編『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』東京：慶応義塾大学出版会、135–178 頁、2008 年。

山崎典子「日本の回教工作：日中戦争とムスリム」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための 60 章』東京：明石書店、268–272 頁、2012 年。

漢語

- 白寿彝『中国回回民族史』北京：中華書局（全2卷）、第1卷、2003年。
- 蒙藏院辦報處『回文白話報』初版1913–1914年、再版、中国早期白話報滙編編委會編『中国早期白話報滙編』、北京：全国圖書館文献縮微複製中心（全40卷）、第11卷、2009年。
- 張巨齡『綠苑鈎沈』北京：民族出版社、2001年。
- 正宗愛國報社『正宗愛國報』初版1906–1913年、再版、北京：中華全国圖書館文献縮微中心編、1987年。

欧米諸語

- Rıza, Ali. 4 Muharrem 1329/5 January 1911. “Pekinden” [From Peking], *Sırat-ı Müstakim* 122 : 298–299.
- Aykurt, Çetin. 2013. “Bir Büyük Düşünce: Pekin Hamidiye Üniversitesi.” *Tarih İncelemeleri Dergisi* 128 (1): 37–50.
- Broomhall, Marshall. 1966 (1910). *Islam in China: A Neglected Problem*, New York, NY: Paragon Book Reprint Corp.
- Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier*. Cambridge: Harvard University Press.
- Cieciura, Włodzimierz. 2016. “Ethnicity of Religion? Republican-Era Chinese Debates on Islam and Muslims,” *Islamic Thought in China: Sino-Muslim Intellectual Evolution from the 17th to the 21st Century*, ed. by Jonathan N. Lipman, Edinburgh: Edinburgh University Press, 107–146.
- Fidan, Giray. 2019. *Chinese Travelers to the Early Turkish Republic*. Princeton, NJ: Markus Wiener Publishers.
- Hammond, Kelly A. 2020. *China’s Muslims and Japan’s Empire: Centering Islam in World War II*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- İbrahim, Abdürreşid. 1911. ‘Âlem-i İslâm ve Japonya’da İntişâr-ı İslâm. İstanbul: Ahmed Sâkî Bey Matba’ası (2 vols), vol 1.
- Islamic Fraternity*. 1910–1912.
- Lipman, Jonathan N. 1997. *Familiar Strangers: A History of Muslims in Northwest China*. Seattle: The University of Washington Press.
- Lipman, Jonathan N. 2006. “A Fierce and Brutal People’: On Islam and Muslims in Qing Law,” *Empire at the Margins: Culture, Ethnicity, and Frontier in Early Modern China*, ed. by Pamela Kyle Crossley, Helen F. Siu, and Donald S. Sutton, Berkeley: University of California Press, 83–110.
- Mustafa bin Mustafa, Mihalçlı. 2010 (1894). *Bir Osmanlı Bürokratının Uzakdoğu*

- Seyahati*. 1st ed. İstanbul: Çamlıca Basım Yayın.
- Palabıyık, Mustafa S. 2013. "The Ottoman Travellers' Perceptions of the Far East in the Early Twentieth Century," *Bilig* 65: 285–310.
- Sırma, İhsan S. 1978. "Pekin Hamidiyye Üniversitesi [Beijing's Hamidiyye University]," *Prof. M. Tayyib Okiç Armağanı*. Ankara: Sevinç Matbaası, 159–170.
- Sırma, İhsan S. 1979. "Sutlan II. Abdülhamid ve Çin Müslümanları [Sutlan Abdülhamid II and the Chinese Muslims]," *İslam Tedkikleri Enstitüsü Dergisi* 8 (3/4): 199–205.
- Unno (née Yamazaki), Noriko. 2018. "Cutting off the Queue for Faith, Preserving the Queue for Face: Chinese Muslims' Queue-Cutting Movements in North China during the Xinhai Revolution Period," *Asian Studies* 6 (1): 11–31.
- Yamazaki, Noriko. 2014. "Abdürreşid İbrahim's Journey to China: Muslim Communities in the Late Qing as Seen by a Russian-Tatar Intellectual," *Central Asian Survey* 33 (3): 405–420.
- Yamazaki, Noriko. 2018. "20. Asrın Başlarında Pekin'deki İslam Mektepleri ve Yabancı Müslümanlar [Islamic Schools and Foreign Muslims in Beijing in the Early Twentieth Century]," ed. by Dünder, Ali Merthan, *Abdürreşit İbrahim ve Zamanı: Türkiye ve Japonya Arasında Orta Avrasya*. Ankara: Türk Tarih Kurumu, 25–42.